

南半球で創られる中国イメージ

——オーストラリア華人歴史博物館

ホスト社会につくられる移民の博物館は、多文化主義を啓蒙するために建設される。移民の人びとにとっては、自らのルーツを確認する場であると同時に、移住先に根付き、そこでの生活をおとした、自文化の再編成の場でもある。

メルボルン中華街のなかの博物館

オーストラリアの東南部に位置するメルボルンは、一九世紀半ばのゴールドラッシュにより栄え、かつては同国の首都にもなった都市である。この都市にはさまざまな国からやってきた移民が住んでいるが、なかでも華人とよばれる中国系住民は、ここで南半球最大の中華街をつくりあげている。オーストラリア華人歴史博物館 (Museum of Chinese Australian History) はこの中華街のなかにあり、オーストラリアに移民した華人の歴史・文化を展示したり、中国文化の講座をおこなったりしている。地上四階、地下一階からなる、南半球最大級の華人博物館である。

華人博物館の建設と活動

一九八四年、州政府は、多文化主義政策の一環として、メルボルンに華人博物館を建設する必要性を提唱した。しかし、その翌年に、オーストラリア華人歴史博物館として資金を出して設立したのは、実際には華人たち自身であると聞く。それだけに、地元の華人のなかには、「この博物館は自分たちが建てた」と自負する者が少なくない。

こうした認識のためか、オーストラリア華人歴史博物館は、単に文物を展示するだけでなく、市民を対象とする諸々のイベントを催している。筆者は、ちょうど中国の春節(旧正月)にあたる旧暦一月一日にメルボルンを訪れた。この日は、同博物館が春節のメインイベントのひとつである龍のパレードを中心となって実施していた。パレードに使う龍、麒麟、山羊や魚などは、華人団体である大龍会系住民が見学を訪れ、市街をとおるトラム(路面電車)も一時停止するほど、賑やかになる。

館員の話によれば、龍のパレードは、オーストラリアの文化祭である三月のムーンバ・フェスティバルのときもおこなう。また、旧暦八月二十五日の中秋節には、予算に余裕があれば入場料を無料にし、月餅を配ったり、書道や茶のコーナーを設けて市民に中国文化を教えたりする。

想像／創造される中国イメージ

オーストラリア華人歴史博物館には年間約四万人の入館者がいるが、入館料の収入では運営もままならず、華人団体の援助により経営がなっているため、スタッフは一〇名前後しかない。彼らの約半数はパートタイム職員であり、また、ラ・トロープ大学は、一〇名前後しかいない。彼らがいる。ラ・トロープ大学は、オーストラリアでもっとも華僑・華人研究が盛んな大学のひとつである。それゆえ、同博物館は、ラ・トロープ大学との関係のもと、館内でも華僑・華人をめぐる学術討論会を開催し、オーストラリア華人やオセアニア華人に関する専門書を出版している。この博物館は、展示や市民活動の舞台であるだけでなく、研究機関としての機能も兼ね備えている。

ただし、同博物館におけるオーストラリア華人研究は、国内の中国系移民を「華人」とひと括りにしてしまう傾向が強く、彼ら内部の多様性をあまり論じていない。メルボルンの華人は、実際には出身地やエスニック集団により言語・文化上の差異が著しいのであるが、それが展示に反映されることはほとんどない。たとえば、オーストラリア華人のおもな出身地は南方の広東省や福建省であり、彼らのなかにはベトナム、シンガポール、東ティモールなどをさらに経由して移住した者も少なくないため、春節の習俗ひとつをとってもかなり異なる。にもかかわらず、展示の際には、大晦日の夜に水餃子を食べるなど、北方の習俗を、中国文化の典型として展示する。

彼らの故郷を知る華人たちは、多少の違和感をもっていただとしても、華人内部の差異を強調すると紛糾を招くため、それを展示に反映させることをあまり主張していない。他方で、中国を知らない華人の二世や三世、もしくは白人系住民らは、こうした展示を見て、中国文化に多様性があることを知ることなく、理想化された中国イメージを受け入れている。このように、現地華人の「故郷」の生活文化からかけ離れた想像された中国イメージが、展示をとおして、オーストラリア社会で再生産されているのである。



河合洋尚
民博機関研究員



華人団体による博物館付近での龍舞イベント



春節のパレード。白人系住民の見学者も多い



2階の特別展会場。春節習俗を解説するパネルを展示



博物館の外観。正面の龍は中国らしさを象徴



メルボルン中華街の牌坊(はいぼう)。2013年2月10日撮影